



TITLE:

# 数詞 два, три, четыре を含む構文 の成立について

AUTHOR(S):

山口, 巖

---

CITATION:

山口, 巖. 数詞 два, три, четыре を含む構文の成立について. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 102-116

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65831>

RIGHT:

## 数詞 *два, три, четыре* を含む構文の成立について<sup>1</sup>

### I. 序論

§1 周知のように現代ロシア語においては数詞 *два (две), три, четыре* 及び *оба (обе)* は名詞の単数生格を要求し、複数生格を要求する *пять* 以上の数詞とはその統辞論的構造を異にしている。このような特殊な構文は、それが内包する論理的矛盾の故に奇異にも感ぜられ、従ってまた研究者の注意を惹くことも稀ではなかったが、その成立の事情に関しては未だ充分に説明せられたとはいえないのが現状である。

古代ロシア語においては数詞 1, 2, 3, 4 は形容詞的修飾語として性数格の一致を行い、被修飾語たる名詞は数詞の意義に従って各々単数(1)、双数(2)、複数(3, 4)の主格の形をとっていた。このような本来の状態が現在みられる構文に変化するについては、諸家の見解は概ね一致している<sup>2</sup>。代表的なものとして Л. А. Булаховский の所説を引用すれば、この構文は先ず「形態論的範疇としての双数の喪失に伴い *два коня, два дуба* のような結合が *два* と単数生格の結合と感ぜられるに至り、このような理解の影響によって古い結合 *двѣ сестрѣ, двѣ горѣ, двѣ целѣ, двѣ поли* が *две сестры, две горы, два села, два поля* に変化した」ことにはじまり、次いで「最も近い数詞 *три* 及び *четыре* も自己の以前の統辞論的特徴を失ってその結合を *два, двѣ* における関係に倣った」結果成立したものであるとされている<sup>3</sup>。

このような見解に対して特にとりあげるべき異説の存在しないことは<sup>4</sup>、これが充分に説得的であるとして一般に承認せられていることを物語るものとしてもよいであろう。

§2 ところでこの説明は、既に明かなように「*два* + 男性双数主格形」の構文における双数主格形が、① 双数の範疇の廃絶によって ② これと形を同じくする単数生格形と意識されるようになり、これに伴って ③ 双数主格と単数生格の形を異にする中性及び女性

<sup>1</sup> 『人文』第13集 1967年 57-77頁。

<sup>2</sup> 例えば В. И. Ворковский, П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*, АН СССР М. 1965, p. 206; П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1954, p. 159; А. А. Шахматов, *Историческая морфология русского языка*, М. 1957, pp. 207 & seq.; Т. П. Ломтев, *Очерки по историческому синтаксису русского языка*, М. 1956, pp. 449-450. etc.

<sup>3</sup> Л. А. Булаховский, *Исторический комментарий к русскому литературному языку*, Киев 1958, p. 331.

<sup>4</sup> А. Meillet 及び Я. А. Спринчак は *два пуда* のような形を単数生格と同形ではあるが意義的には複数であるとしている。しかしこのような判断は立証を伴わず、恣意的なものにすぎない。cf. A. Meillet, *Le slave commun*, Paris 1934, p. 460; Я. А. Спринчак, *Очерк русского исторического синтаксиса*, Киев 1960, pp. 188-189.

名詞も単数生格形をとるに至り、④ やがてこの構文が確立するに及んで два (двѣ) と意義的に近い три, четыре にも単数生格形が一般化する、という relative chronology を前提としてのみ成立し得る議論である。

しかしこれには反証がある。① 双数が未だ文法範疇として用いられているにも拘わらず три 或いは четыре と結んで双数生格形が使用せられる事の稀ではないこと、② 双数が男性名詞において最も永く保存されたこと、③ 「два (двѣ) + 単数生格」の構文が形式的にも意義の上からも複数であった три, четыре を含む構文に何故一般化したかが説明できないこと、等がこれである。

この構文の成立が双数の廃絶と深く関わり合っていることには、恐らく疑問の余地がないと思われるが、この場合形式内容共に複数である名詞と結ぶ три 及び четыре の影響によって два (двѣ) が複数主格と結ぶに至るのが、寧ろ自然の成行きではあるまいか。事実スラヴ語の内部においても例えばチェコ語の dva (dvě)、ポーランド語の dwaj にみられるように tři, čtyři もしくは trzy, cztery に倣って複数主格と結ぶ言語も現実に存在しているのである<sup>5</sup>。ロシア語においてこれに逆行する変化が生じたとするならば、それには相応の説明がなされなければなるまい。

また双数が男性名詞に最も永く保存せられたという事実は、従来の所説の成立を危うくするものと考えられる。双数主格形と単数生格形が等しいのは E/O 語幹男性名詞に限られており、女性あるいは中性名詞の双数主格形が直接に単数生格と意識されるようになるとは考えられないからである。

以上の諸点を考慮すれば従来の定説には必ずしも承認し難い点が含まれているように感ぜられてくる。このような事情に鑑み、若干の実例についてその構文を観察しつつ現代ロシア語にみられる構文の成立について何等かの手掛りらしいものを得たいというのが、この小論の主旨であり、また希望でもある。これが単なる問題の提起に過ぎぬことを特に断っておきたい。

## II. 文献資料

§3 先ず問題とすべきものに資料の選択がある。バルト・スラヴの諸言語は印欧諸語のうちでも比較的良好に双数を保存しており、リトワニア語をはじめとしてソルビア、スロヴェンの諸語には今なおこの範疇が使用せられているが、これについては A. Dostál のように他のバルト語及びスラヴ語との接触を失った結果生じた所謂 formes hypercorrigées であるとする説がある<sup>6</sup>。もとより数は印欧語の最も基本的な文法範疇の一つであり、双数の廃絶はこの数の体系の変容を意味しているから、この範疇の廃絶に際して強い抵抗が存在

<sup>5</sup> この外数詞 2, 3, 4 が複数主格形の名詞と結ぶ言語にはスロヴァキア、白ロシア、ウクライナの諸語がある。J. Šerech はこれらの言語が何れも u 語幹名詞の影響を受けているところからこれらの言語において数詞 2, 3, 4 が単数生格を要求するには至らなかった理由を単数生格形 -y の一般化に帰している。cf. J. Šerech, *Probleme der Bildung des Zahlwortes als Redeteil in den Slavischen Sprachen*, Lund 1952, p. 55.

<sup>6</sup> A. Dostál, *Vývoj duálu v slovanských jazycích zvl. v Polštině*, Praha 1954, pp. 17-18.

したであろうことは当然予想されるところである。古代ロシア語の年代記のように当時の文語たる教会スラヴ語の影響の著るしい、いわば「高い」文体によって誌された文献と、比較的口語的性格の勝った文献との間にみられる双数の使用の相違も、このような推論を支持している。古代スラヴ語においても既に双数は文学語として整理されており、必ずしも現実を反映したものではないという A. Dostál の主張も、強ち根拠のないものではないとすべきであろう。

既に見たように数詞 2, 3, 4 を含む新しい構文の成立は双数の廃用と密接に関連していると考えられるから、双数の使用における上述のような特殊な事情はこの構文の考察に影響を及ぼさずにはおかないと考えられる。事実これは著者の性向、社会的身分、教養、文体の高低、文献の種類、成立の時期及び場所等極めて錯綜した諸条件に左右せられ、ために現実の変化の道程を辿ることはかなりの程度に困難である。

これらの諸条件相互の関与の度合及び関与の仕方を決定すべき何等の方法或いは基準も存在しない以上、考察にあたっては上述の諸条件をできるかぎり等しくすることが要請される。

このような考慮の下にキエフ周辺で成立した口語的色彩の比較的強い「イーゴリ公征旅の歌」及び北部で成立した最も古い文献としての「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本」の外はすべて北部（ノヴゴロド周辺及びモスクワの台頭ののちはモスクワ周辺）において成立した法令集及びその他二、三の文書を用いることにした。

使用文献は次の通りである。

1. Сого о полку Игорве. Л. А. Дмитриев, *История первого издания "Слова о полку Игореве"*, М.-Л. 1960, pp. 257-266.
2. *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, М.-Л. 1950, pp. 15-100.
3. *Русская правда, по Коммиссионному списку Новгородской первой летописи*, pp. 167-180.
4. *Новгородская судная грамота 1440? г., Памятники русского права (ПРП) 2*, pp. 212-218.
5. *Псковская судная грамота 1450 г., ПРП 2*, pp. 286-301.
6. *Духовная грамота Климента 1147 г., ПРП 2*, pp. 108-110.
7. *Духовная грамота Ивана Калиты 1327 г., ПРП 2*, pp. 253-256.
8. *Судебник 1497 г., ПРП 3*, pp. 341-357.

9. Судебник 1550 г., ПРП 4, pp. 233-261.
10. Судебник 1589 г., ПРП 4, pp. 413-443.
11. Соборное уложение 1649 г., М. 1961.

この外 1137 年の Устав князя Святослава Ольговича (ПРП 2, pp. 117-118)、17 世紀前半の Судебные акты (ПРП 5, pp. 139-158) 並びに Уставные книги разбойного приказа (ПРП 5, pp. 188 & seq.) と呼ばれる文書類のように比較的短いものについても随時参照した。

### III. 名詞の双数形

§4 古代ロシア語の本来の名詞変化語尾は双数及び複数においては、右の通りである。

この表から明らかなように、I 語幹女性の *кость* のタイプのみが古くから双数及び複数主格形並びに単数生格形について同形である外は、I 語幹男性及び O 語幹男性の硬変化及び軟変化において双数主格形と単数生格形が同形であるに過ぎない。

語幹	単数	双数	複数	(単生)
О	сто-ль	-а	-и	(-а)
〃	кон-ь	-я	-и	(-я)
〃	лѣт-о	-ѣ	-а	(-а)
〃	пол-е	-и	-я	(-я)
У	сын-ъ	-ы	-ове	(-у)
А	жен-а	-ѣ	-ы	(-ы)
〃	земл-я	-и	-ѣ	(-ѣ)
І	пут-ъ	-и	-ие	(-и)
〃	кост-ь	-и	-и	(-и)
子音	камы	-ен-и	-ен-е	(-ен-е)
〃	слово	-ес-ѣ	-ес-а	(-ес-е)
〃	мати	-ер-и	-ер-е	(-ер-е)

### IV. 中性名詞

§5 ノヴゴロド原初年代記シノダリ本は成立が古く、文体的にも高い言語によって誌されているところから、双数形の使用が比較的厳密であることは当然であるが、それにも拘わらず既に若干の重要な変化の生じているのが認められる。その最も著しいのは中性名詞の場合である。これは僅少の例を除外すれば *два* と結んで本来の双数形を用いることはない。例えば、

1. Мирошка приде посадникъ, сѣдевъ 2 лѣта за Новгородъ. (54-9)

双数の崩壊が比較的遅いとされているキエフ周辺において成立した「イーゴリ公」にも同様の現象が認められる。例えば、

2. Темно бо бѣ въ ѿ день: два солнца помѣркаста. (25-1)

3. Ваю храбрая **сердца** въ жестоцемъ харалузѣ скована, а въ буести закалена. (26-6)

4. Уже соколома **крыльца** припѣшали поганых саблями... (24-4)

このような形を現代ロシア語からの類推によって単数生格形とすることは妥当ではない。男性及び女性名詞において未だ双数形が正確に使用され、またこれと一致する動詞及び形容詞も双数形を保持しているからである。話者の意識において双数は未だ独立の範疇として機能していたとせねばならない。③及び④の例にみられるようにこれが数詞を伴わずに使用され、かつ双数形の述語をとる場合があるのもこのことを裏書きしている。

また③のような例の存在することからすれば **сердца** の形は少くとも「主格」と意識されていたと考えないわけにはいかない。数に関してはこれが複数と同形であるところから複数とも考えられようし<sup>7</sup>、また男性名詞との類推によって生じた双数形であるとすることもできよう<sup>8</sup>。何れを採るべきかについては確たる根拠がない。

数詞 3 及び 4 と結ぶ複数主対格の例はノヴゴロド年代記では例えば、

5. (Исаковиць) въсаженъ бысть въ бочку имущи 3 **дна** при единѣмъ конци. (65-4)

6. ...и пребывъ тамо 3 **лѣта**, поиде в землю къ отцю своему. (141-8)

イーゴリ公では例えば、

7. чръныя тучя съморя идуть, хотятъ прикрыти ѿ **солнца**. (12-2)

双数形と複数形が区別されない場合は古くから存在し I 語幹女性名詞がそうであったが、今ここに中性名詞が加わったことは双数の範疇にとって重要な意義を持っていたと考えられる。複数と双数を機能的にも混同し、双数の範疇そのものの自立性を弱める事に通じるからである。してみればこの変化はまた数詞 2, 3, 4 が同じ構文をとるに至る一連の変化をもたらす一つの重要な契機をなすものと考えられてくる。この変化に注目する所以である。

§6 古形を保存する場合は例えば、

8. Ведома же има слепома и гньющема **очма**... (Новг. лет. 41-9).

<sup>7</sup>註 4 参照。

<sup>8</sup>中性名詞は本来 **двѣ** の形と結んでいたが (cf. **двѣ стѣ** > **двести**) やがて男性名詞と同じく **два** と結ぶようになった。この事実は **сердца** のような形が男性名詞との類推によって生じたという考えを支持するもののようにも思われる。しかし **два пуда** における **пуда** の形が単数生格と感じられるようになったため **сердце** の単数生格形 **сердца** が用いられるようになったとする Т. Д. Ломтев (op. cit., p. 450)、П. Я. Черных (op. cit., p. 218) 等の説明は chronology を無視しており、承服できない。

9. Чему мычеши Хиновъскыя стрѣлки на своею не трудною **крилицю** на моя лады вои. (Иг. 38-5)
10. Тяжко ти головы, кромѣ **плечю**: зло ти тѣлу, кромѣ головы: Руской земли без Игоря. (Иг. 44-5)

上例の **очи**, **плечи** の形は現代ロシア語においても保存せられ複数として取扱われている。これが **серца** のような形と並存していたとすれば、当然そこには何等かの相違が存在していたとみるべきであろう。現在のところこれについて判断すべき十分な資料がないが、語彙的意義からすれば、単に二個の対象を指示するに留る *dualis* か、あるいはこの対象間に一定の密接な関係があるものとして表示する *ambalis* かの相違に帰せられるのではないかとする推測も成り立つ。これを明らかにする為には更に古い資料が必要となる。今後の課題としたい。

## V. 女性名詞

§7 女性名詞の双数はノヴゴロド年代記において未だ古形を保っている。

11. и въда имъ Святопѣлка и своего **руку**. (22!-2) [! は verso]
12. а что о манастиремъ по всѣмъ **церквама**, вся узорочья и иконы одраша. (64-2)
13. бысть дорогъвъ, оже купляху по двѣ **ногатѣ** хлѣбъ... (49-2)
14. а пособи богъ Мъстиславу, и въ городъ Галиць въеха, а королевица **рукама** яща. (92-8)
15. И ту присла князь Дмитрии владыку тѣмърьского, и покончаша миръ на дву **тысячу** серебра. (162-1)

他方極めて僅かではあるが、斜格において複数形を使用する例も存在している。例えば、

16. а инѣх **руками** изымаша. (127!-5, 129-7)

既に述べたように I 語幹女性名詞は主対格において双数と複数が同形であった (cf. 17)。また (I)A 語幹名詞の場合双数形は -и、複数形は -ѣ であったが、複数形は 11-13 世紀に漸次 -и の形によって代替せられた。これは硬軟の対立が明確化するに伴い、軟変化の語尾を硬変化語尾 -ы に対応せしめようとする所謂 *Sytemzwang* によるものとされているが<sup>9</sup>、この変化によって双数形と複数形が形態的に混同されるに至った (cf. *infra* ⑬)。ま

<sup>9</sup>W. K. Matthews, *Russian Historical Grammar*, London 1960, p. 190, § 410.

た第五変化に属する子音幹名詞は双数形 **-и**、複数形 **-е** の語尾を有していたが、早い時期に I 語幹と混同せられ、複数形に **-и** の語尾を使用するに至った。結果としてこの場合にも双数と複数の形態的一致が招来せられたのである (cf. infra ㉑)。例えば、

17. Въ то же лѣто паде метыль густъ по земли и по водѣ и по хоромомъ,  
по 2 ноци. (11!-5)

18. Стояста 2 недѣли пълне, яко искря гуде, теплѣ велми, переже жатвы.  
(23!-8)

19. Томъ же лѣтѣ загорѣся пожаръ въ Славнѣ от Къснятина, и съгорѣста  
церкви 2. (44-8)

これに対して A 語幹硬変化名詞の場合には 2 と結ぶ際主対格で複数と異なる双数形 **-ѣ** をとり (cf. supra ㉑)、例外は認められない。例えば、

20. а новгородци учиниша острогъ около города по обѣ сторонѣ, и соидеся  
волость новгородская. (160-7)

この中には男性名詞も一例含まれる。

21. ...а у города того оста 2 воеводѣ Цыгирканъ и Тешюканъ... (98!-10)

§8 既に述べたように数詞 3 及び 4 と結ぶ名詞は複数形をとる。主対格の例は下記の通りである。

22. Въ то же лѣто загореся пожаръ от Деигуницъ, и съгорѣша церкви 3.  
(40-2)

23. и бяше град твердъ Юрьевъ 3 стѣны. (139-3)

24. Томъ же лѣтѣ съдѣлаша 4 церкви. (24!-6)

25. озеро морози въ ночь, и растърза вѣтръ, и вънесе въ Волхово, и  
поломи мостъ, 4 городнѣ отинуудъ бе-знатбе занесе. (23-7)

しかし数詞 3, 4 と結んで双数形が使用されている例も僅かではあるが既に存在している。例えば、

26. кадь ржи купляхуть по 10 грибенъ а овса по 3 гривѣ а рѣплѣ возъ по  
2 гривнѣ. (81!-3)



27. и купляхы кадь рѣжи по 4 гривнѣ а хлѣбъ по ногатѣ... (37-7)

ノヴゴロド原初年代記においてはこのような例は 3 と結ぶもの 3 例、4 と結ぶもの 1 例に過ぎないが、このような例の存在は女性 A 語幹名詞の双数形と複数形が既にこの時代に機能的にも混同される萌しをみせていたことを物語るものであろう。もしそうとするならば、これは女性 I 語幹名詞における双数形及び複数形 -и が形態的一致の故に機能的にも混同されていたことを前提とせねばならない。これは更に два と結ぶ сердца の形が複数形と意識されつつあったという考えを支持するものでもある (cf. § 5)。

男性名詞との関係について一言すれば 3 と結ぶ男性名詞 18 例中複数形をとるもの 17 例、4 と結ぶもの 10 例中複数形をとるものは 9 例であるのに対し、女性名詞の場合は、3 と結ぶもの 7 例中 3 例、4 と結ぶもの 5 例中 1 例が夫々双数形をとっているところから、ノヴゴロド原初年代記において双数と複数の混同が行われつつあったのは、主として女性名詞に関してであるような印象をうける。

§9 ノヴゴロド原初年代記の所謂若編年体 Младший извод 中に収録せられるロシア最古の法令集ルスカヤ・プラヴダは、

コミシオン本、トルストイ本、アカデミー本の三種の異本を有している。今この中にみられる гривна の結合をコミシオン本を底本として示せば、次の通りである (括弧の中は異本)。

2	гривнѣ	3	例
3	гривны(гривнѣ)	4	例
3	гривнѣ(гривны)	3	例
3	гривнѣ	5	例
3	гривны	1	例

表から明らかなように数詞 2 と結ぶ гривна はすべて双数形をとり、異本が存在しないが、3 と結ぶ場合にも 1 例を除いて双数形 гривнѣ を異本にもつかもしくは自から双数形に立っている。特に異本なく双数形をとるものが 5 例も存在することは著るしい現象である。4 と結ぶ例が存在しないことは残念ではあるがまた止むを得ない。

これと関連して興味を惹くものに数詞 12 との結合がある。ルスカヤ・プラヴダにおけるこの種の用例 11 例中 9 例が гривна との結合であるが、гривна はすべて双数形をもって現われている。例えば、

28. ... то холопа пояти, да платить за него господинъ его 12 гривнѣ. (Ком. сп. 80!-12)

29. ... а от 12 гривну емьчю 70 кунъ. (Ком. сп. 82-5)

他の 2 例も мужа 及び вѣверици であり、共に双数形と考えられる。

30. то ити ему на изводъ предъ 12. мужа (А. Т. человека). (Ком. сп. 80!-7)

31. а вирнику 60 гривенъ и 10 рѣзанъ и 12 вѣверици (Т. дванадесять вѣреницы). (Ком. сп. 82-11)

これは数詞 12 (дванадесять) が未だ本来の複合数詞としての機能を失っていなかったことを示すものであるが、この構文によってノヴゴロド原初年代記中に 1 例見出される 12 дни (и стоявъше 12 дни. 80-5) も双数形であると決定できる。同様にして лѣта 14 (16!-10) の形も複数主対格形であることが判明する (cf. supra ⑤ ⑥ ⑦)。

1270 年の Духовная Климента (資料の項参照) にも 2 гривне<sup>10</sup> と並んで 13 ногате, 4 гривне の形が認められ、双数形の一般化の傾向を裏付けている。例えば、

32. а у Козе Вътыши 2 гривне Климяте възяти. (ПРП 2, р. 109)

33. възяти Климяте на Борьке 13 ногате. (ibid.)

34. В купецком съте у Фоми 8 гривн възмите, а у Борькы 4 гривне. (ibid.)

然るにこれから約一世紀を経て 14 世紀末葉に成立した Рукописание князя Всеволода Мстиславича においては逆に複数形が 2, 3, 4 を含む構文に一般化している。例えば、

35. А у гостя им имати...у полоцкого и у смоленского по две гривны кун... (ПРП 2, р. 176)

36. попом по осми гривен серебра, а дьякону четыре гривны серебра, а дьяку три гривны серебра. (ibid.)

А 語幹男性名詞も同様に、

37. И яз князь великий Всеволод поставил есми святому Ивану три старосты житых людей...а от купцев два старо(с)ты. (ibid.)

この傾向はその後も変ることなく、15 世紀の 70 年代に成立した Новгородская судная грамота, Псковская судная грамота (資料参照) 等においても数詞 двѣ と結合する女性名詞はすべて -ы (и) を語尾としている。

これが単数生格であり得ないことはこれらの文献において男性名詞がことごとく双数形を保存し、動揺の萌しが見えはじめるのがようやく 1550 年の Судебник に至ってであることから明らかである。例えば 1550 年の Судебник では、

<sup>10</sup>2 гривна は本来は 2 гривнѣ とすべきもの。ПРП は所謂 облегченная транскрипция を採用しており、ѣ はすべて е と書写せられている。以下も同様である。

38. А похотят оба исца...срок отписати, и они оба платят...(ПРП 4, р. 241)

39. А будет оба исцы...служилые люди. (ibid.)

40. а будет оба исцы того города или волости, а насместнику или волостелю оба будут судимы... (ibid.)

㊸ 及び ㊹ を ㊸ と比較すれば明かなように、これらの例は оба исца が全体として複数と意識されていたばかりでなく、исца それ自身が исцы と代替し得るもの、即ち複数形と考えられていた事を示している。

このような事情を考慮すれば、㊸, ㊹, ㊺ の諸例にみられる形が単数生格形と意識されていたとするのは、あり得べき想定ではない。

これに関連して興味を惹くものに 1327 年のモスクワ大公イヴァン・カリタの遺言状がある。ここでは男性名詞は例えば 2 овкача золота (ПРП, р. 252), 2 чума золота большая (ibid.), 2 чумка золота (ibid.) のように双数形を保存しているのに対し、女性名詞は 2 чашки круглыи золоты (ibid.), 2 чары золоты (ibid.) のように複数主格の形容詞を伴っている。従ってこの場合にも чашки 等が複数主格と意識せられていた事は確定的と考えてよいであろう。

§10 女性名詞における複数主格の一般化がどのようにして生じたかについては、13-14 世紀の資料を更に詳しく検討する必要があるが、この点に関しては今後の研究に俟つより外はない。現在のところ単なる想像に過ぎないが、これは恐らくは双数形と複数形の機能の混同が進行し、やがて両者が単なる allomorph となるに及んで硬軟の母音を対応せしめようとする体系の圧力の下に -ы の形が固定するという過程を辿った結果ではないかと、考えられる。

このような想定には双数形 ъ と複数形 и とが十分に機能的に混同せられている事が前提となっている。即ち два гривнѣ における双数形 гривнѣ の形が強固であった為此の形が три 及び четыре にも一般化し、гривны の形と並用されるに及んで機能的にこれと混同され、やがて два の場合にも гривны の形が使用されるに至ったと考えられるのである。もし гривнѣ の一般化を経ずに гривны の形が直接に 2 に一般化したとすれば、当然その一般化には限度があり、男性名詞 два шага, два ряда あるいは берега, бока 等、並びに中性名詞 уши, очи, плечи 等と並行する、例えば руцѣ, нозѣ 等に由来する形が現代ロシア語にも存在して然るべきであると思考される。その他 гривнѣ の形が гривны によって代替せられるに至った一つの契機をなすものとして чаша - чашки (双数)、вѣкша - вѣкши (双数) のような上顎音幹の名詞の存在が考えられるが、これも単なる推測の域を出ない。また 13-14 世紀はロシア語の方言的特徴がはじめて明確な形

をとってあらわれはじめた時期であり、ノヴゴロドを含む北部方言では音韻 **ѣ** 及び **и** が混同される傾向を有していた事から、これがノヴゴロド周辺の言語に双数の廃用の過程が早く開始された事と何等かの関連をもっていたのではないかとする推測も成立し得るが、これが決定的な役割を果していたと信ずる事はむずかしいと思われる。

## VI. 男性名詞

§11 女性及び中性名詞に較べれば男性名詞は概して保守的である。今ノヴゴロド原初年代記について規範的な用例を示せば、

41. Тои же весне преставистася у Ярослава сына 2. (60-4)
42. На святуу мученику Карпа и Папула. (48!-8)
43. и тѣ оканьнии воевода цѣловавъ крестъ честынии къ Мьстиславу и къ обѣма князьма. (99-4)
44. ...и два княжича взяша. (142-9)
45. Въ то же лѣто, на зиму, придоша... Муромьци и Рязаньци съ двема князьма. (36!-4)

これに対して数詞 2 と結んで複数形をとるものは斜格で 1 例のみであり、3, 4 と結んで双数形をとるものも 1 例に限られている。

46. ...заложиша Лукиници церковь камяну святых апостоль Петра и Павла на Сильници. (46-9)
47. да положимъ 3 жрѣбья, да которыи богъ дастъ намъ. (109-2)
48. и ту убиша... рушанъ 4 мужа. (118-8)

О 語幹男性名詞の軟変化 (YO 語幹) も双数形を保存している。例えば

49. Погрѣбена быста 2 князя, сына Святославля. (2!-11)
50. И сѣде 2 мѣсяця. (17-5)

他方子音幹名詞 **днь** の双数形は **дње** のはずであるが、スラヴ語の子音幹名詞一般にみられる I 語幹名詞の影響によって複数形と同じく **дни** の形をとった (cf. supra ⑨)。また I 語幹男性名詞 **путь** 等の複数形は **путие** であるが (cf. supra § 4) これも **пути** となる事によって双数形との形態的区別を失った。例えば、

51. и стояша два дни пѣши за Жилотугомъ а коневыници за Городищемъ. (149!-4)

52. И стояша ту Фрязи 3 дни. (69-2)
53. и яко внидоша в землю ихъ, и роздѣлишася на 3 пути. (144-8)
- この外特殊なものとして次のような用例がみられる。
54. Пѣренесена быста Бориса и Гребѣ. (4!-10)
55. Убиша Володимири князя Андрея свои милостыници: на канонъ свя-  
акою Петру и Павру... (39-5)
56. нацѣша дѣлати (св. церковь) мѣсяця мая въ 21, на святую цѣсарю  
Костянтину и Елены... (59!-2)

これらの例においては例えば Борисъ и Глѣбъ, Петръ Павръ のように単数形を用いるべき所に双数形が使用されている。Л. А. Булаховский はこれが梵語の *mātarā-pitarā* にみられるような古い印欧語の統辞論的慣用の名残りであるかも知れぬと述べている<sup>11</sup>。この説の当否については論議する立場にないので、特殊な用例として指摘するに留めておきたい。

ただこの種の構文が存在する事は、その来源がいかようなものであれノヴゴロド年代記においては男性名詞に関して双数の意識が未だ極めて強固であった事を示すものと考えられる。

§12 前節において述べたようにノヴゴロド原初年代記中の男性名詞は双数形をよく保存している。この傾向は「イーゴリ公」はもとより *Новгородская судная грамота*, *Псковская судная грамота* 等の外 1497 年の *Судебник* においても同様であり、双数と複数は厳重に区別されている。動詞に次いで最も複数形の影響を受け易い形容詞修飾語が 1327 年の *Духовная грамота Ивана Калиты* において未だ男性名詞と結んで双数形を保存している事は既に述べた通りである (cf. § 8)。

1550 年の *Судебник* になれば、このような区別がようやく崩れ、混同が生じつつあるのが観察される。例えば本来の形、

57. за повоз имати 3 двора по два алтына (ПРП 4, р. 258)
58. да неделщику же вязчего четыре алтыны без дву денег. (ibid., р. 235)

に対して

59. да неделщику ж вязчего четыре алтына без дву денег. (ibid., р. 235)

<sup>11</sup> Л. А. Булаховский, *op. cit.*, pp. 316-317.

また軟変化名詞では

60. а жене его безчестья два рубля. (*ibid.*, p. 239)

61. да за доспех убитого три рубли. (*ibid.*, p. 235)

に対して

62. да за доспех убитого три рубля. (*ibid.*)

この *Судебник* には два алтыны, два публиのような形は未だみられないが、これより約 40 年後に成立した 1589 年の *Судебник* には既にこの種の形もみとめられる。

63. А пошлины имать на ищее за боран 2 алтыны. (*ibid.*, p. 433)

この文献にみられる оба исца と оба исцы については既に述べた (cf. *supra* ③⑧, ③⑨, ④⑩)。

このようにして男性名詞の双数と複数の混同は女性及び中性名詞よりもかなり遅く、およそ 16 世紀の中葉から本格的に開始されることが確かめられたが、1550 年と 1589 年の *Судебник* を比較すれば明かなように男性名詞も女性名詞の場合と同じく先ず双数形が数詞 3 及び 4 と結ぶ構文に一般化し、次いで allomorph. となった複数形が数詞 2 と結ぶ構文にも用いられるという経過を辿ったものと考えられる。

§13 資料的制約によってこれ以後の時期については未だ詳らかにしないが、前節に述べた事からすればロシア語においてもチェコ語等の場合のように数詞 2, 3, 4 と結ぶ名詞が複数主格の形をとる事が期待されよう。それにも拘わらず現代ロシア語においてこれは単数主格である。このくい違いはどのようにして説明すべきであろうか。

1649 年の *Соборное уложение* においては три алтына のような形が複数主対格と意識されていたことは間違いない。例えば、

64. ...кто те лошади на явку приведет, по три алтына по две денги с лошади. (*Соб. улож.*, p. 87)

しかし 63 例に掲げた 2 алтыны のように 2 と結んで複数主格形をとる例は男性 O 語幹硬変化名詞の場合には極めて散発的である。この事から алтына のように双数主格形に由来する形は本来の複数形 алтыны と並んで複数と考えられ、両者は単なる allomorph にすぎないと意識されていたとおもわれるが、本来の複数形が女性名詞の場合と異なり 2 と結ぶ場合に一般化しなかった事から、この両者の間に使用上の分化が生じたのではないかと想像するのが自然である。即ち алтына の形は数詞 2, 3, 4 と結ぶ場合に局限せられたと思われるのである。

他方この時期には О 語幹硬変化並びにこれと混同された У 語幹名詞 (e.g. сынъ) を除けばその他の名詞は既に 2, 3, 4 と結んで複数主格形を用いており、しかも男性 О 語幹軟変化名詞 (e.g. рубль) を除いてすべて単数生格と同形であるところからすれば、双数に由来する О 語幹名詞の新しい複数形が一旦単数生格と解釈せられるや、その他の場合もこれに倣うのは自然の理と考えられよう。

この際男性 О 語幹軟変化名詞のみは複数主格と単数生格の形を異にするから、この種の名詞における形の交替がこの構文における格の意識の変化を示す手掛りとなると期待されよう。この種の名詞は *Соборное уложение* においては、2, 3, 4 の何れとも複数主格形をもって現われている。例えば、

65. Дьячком церковным по три и по два **рубли**; пономарем по два **рубли**; просвирницам по три **рубли**. (*Соб. улож.*, p. 110)

この傾向は *Соборное уложение* と同じ頃に成立した他の文献においても認められ、当時の一般的な状態を反映するものであったと思われる。18 世紀の初めに成立した文献においてもこのような傾向は未だ保存されていた。例えば、

66. ...на сто верст по два **дни**... (*ПРП* 8, p. 76)

67. ...**недели** по три и четыре, а иных месяца по два и по три. (*ПРП* 8, p. 234)<sup>12</sup>

これらの名詞が複数主対格と考えられていたであろうことは、次の例からも明らかである。

68. ...со всякой крепости, подписчику до 50 рублей, по 2 **деньги**, а во 100 рублях по 4 **деньги**... (*ПРП* 8, p. 240)<sup>13</sup>

これより 20-30 年後の 1755 年にロシア人による最初のロシア文法といわれる *Российская грамматика* を書いた М. В. Ломоносов は два рубли と два рубля の形を論じ、前者を誤りであると断じた<sup>14</sup>。これらの事情を考え合せば、Ломоносов の時代がちょうど両者の交替期に当るのではないかと考えられる。勿論 два рубли の形を два рубля によって替えようとする底流はかなり以前から存在していた。例えば、1616-1617 年の資料には、

69. конь 5 рублей, жеребенок конской 2 **рубли**, мерин 2 **рубля**... (*ПРП* 5, p. 198)<sup>15</sup>

<sup>12</sup> Об обряде совершения всякого рода крепостных актов 1701 г.

<sup>13</sup> *ibid.*

<sup>14</sup> *Очерки по исторической грамматике русского литературного языка XIV в.*, под ред. В. В. Виноградова, т.1, М. 1964, p. 186

<sup>15</sup> Уставная книга разбойного приказа 1116-1119 г.

この点に関連して興味あるのは *Соборное уложение* にみられる次の例である。

70. ...пристав по судному делу поручныя записи к делу в три дни не принес... бив велеть ему, ...принести к делу того же дни. (*Соб. улож.*, р. 117)

即ちここでは дни は два дни として複数主対格形と考えられるが、この同じ形が того же дни のように単数生格としても用いられているのである。このような дни の用法は два дни と два дня の間をつなぐものであるかも知れない。

два дни のような形が最終的に два дня の形に代えられるのは 19 世紀の中頃であったと考えられる。例えば 18 世紀末から 19 世紀前半には未だ два дни (Карамзин), три дни (Грибоедов), за четыре дни (С. Глинка) の外例 ㊤ に対応する с самого певого дни (Крылов) のような形さえみられるのである。Пушкин も дня 169 例の外に дни の形を 16 例用いているといわれている<sup>16</sup>。

以上の事情を総合すれば два 等と結ぶ形が単数生格と意識せられるのは学校文法の規範が確立する時期とほぼ一致しており、文法的体系化の要請によるものとみてもよいのではないかと考えられる。

外に言うべきことの残っていないわけではないが<sup>17</sup>、紙幅の都合により他の機会に譲ることにした。

<sup>16</sup> 註 4 参照

<sup>17</sup> 双数と複数の混同は中性名詞にはじまり女性名詞を経て男性名詞に及んでいる。私見によればこの系列は対象の個性性による順序と一致している (cf. 拙稿「ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について」『古代ロシア研究』第2号 昭和37年)。個性性の低い対象を示す語において先ずこの種の混同が生ずるであろう事は、理論的にも当然と考えられる。仮説として示しておきたい。